

フィリピン学校訪問に関する報告

— 複数の言語を利用した基礎教育 —

地歴科(日本史) 玉谷直子

はじめに

2004年12月11日から15日にかけて、平成16年度お茶の水女子大学国際交流事業として、附属高等学校教員によるフィリピンの学校訪問が実施された。訪問者は本校国語科教諭の植田敦子と、地歴科教諭として日本史を担当している玉谷直子である。両者は本校の高校研究推進委員会のプロジェクト国際理解教育（以下、プロジェクト国際と略す）のメンバーであり、後述する外国人生徒への指導を担当している。⁽¹⁾今回の訪問は、その外国人生徒への指導のための研修であった。しかし該当生徒への指導に関する考察は、本稿の主たる目的ではない。該当生徒への指導をめぐる研究はいまだ途上にあり、その全体像を考察することはできないからである。したがって、本稿は今回訪問した学校の様子やカリキュラムなどについての報告を目的としている。それに加えて、フィリピンで基礎教育を受けた生徒を日本の学校で受け入れる際に生じると考えられるのはどのような問題であるか、若干の考察を加えることができれば幸いである。

そのため、訪問した学校について報告している第2章が本稿の中心部分である。第1章では今回のフィリピン訪問実施にいたるまでの経緯について説明するとともに、第2章での報告の前提となるフィリピンの教育制度について簡単に説明した。そして、第3章ではフィリピンと日本の基礎教育を比較し、その違いから生じると考えられる問題について考察している。

なお、海外の学校訪問経験のまったくなかった私達二人がフィリピンの学校訪問を無事終えられたのは、多くの方々のご協力くださったおかげである。特に、独立行政法人国際協力機構人間開発部第一グループ及びフィリピン事務所の方々、日本外交協会の方々のご協力には心より御礼申し上げたい。

1. 実施にいたる経緯及び実施の目標

本校では、1996年より国際理解教育の一環として、外国人生徒を若干名特別枠で募集し、応募があった年は、選考の上、毎年1名を受け入れてきた。⁽²⁾受け入れた生徒の多くは中国籍の生徒であったが、2003年度には初めてフィリピン国籍を持つ生徒を受け入れた。この生徒は2000年3月末にフィリピンで小学校を卒業した後、ハイスクールには通わずに自宅で日本語を学ぶなどの来日準備をしてから、2000年10月末に来日して日本の中学校に2年5ヶ月通学した。そして2003年3月に日本で中学校を卒業した

後、2003年4月に本校に入学した。本校では、日本語教育専門家による日本語の支援や、国語や地理歴史などの一部の科目で特別カリキュラムを実施しているが、基本的には他の生徒と同様、クラスでの通常の授業を受けさせている。

この生徒への指導の過程で、私達はさまざまな問題に直面した。特に学習面での問題が大きい。なかでも数学や理科の学習では、生徒自身も教員も苦しんだ。また、日本語及び英語に関しては、会話にはほとんど問題がなかったが、体系的な学習はなかなか進まなかった。一般的な高校生に比べると読解力も不足していた。しかし、本校の授業内容が該当生徒にとって難しすぎるというだけでなく、学習方法そのものを習得できていないことが最大の問題であることが次第にわかってきた。それらの問題の要因はいくつかあるだろうが、該当生徒の状況や話などから、主な要因は、この生徒が本校が外国人生徒枠で受け入れた初めての非漢字圏出身の生徒であること、また、フィリピンの教育システムや授業方法が日本と異なっていること、この2点にあるようにプロジェクト国際では考えていた。

前者の要因は、本校がこれまでに蓄積した指導法が、該当生徒にとって最も効果的な指導にはなっていないのではないかという推測につながる。後者には、2つのレベルの問題があるだろう。1つは教育課程の違いであり、もう1つは授業方法の違いである。該当生徒は、様々な教科目に関して、「フィリピンでは習っていない。」「そういう習い方はしていない。」というようなことをよく言う。そのため、日本では小学校で学習する内容をフィリピンでは中等教育学校で学ぶのではないかと、また、フィリピンの小学校ではいわゆるドリル学習などの反復練習的な学習をさせていないのではないかと、という2つの推測をプロジェクト国際では抱くようになっていた。そして、それら3つの推測にそって、日本語だけではなく多くの教科の支援方法を再三にわたって検討し、細部にわたる学習指導を行ってきた。⁽³⁾

こうした学習支援はなかなか効果をあげることができなかった。むしろ、該当生徒を混乱させているだけのような感もあった。そのため、プロジェクト国際では、2003年秋頃からフィリピンの学校教育について詳しいことを調査すると、より効果的な支援を実施できるのではないかと考えるようになった。フィリピンの小学校での授業方法を知ることにより、該当生徒の認知構造を理解することができれば、より効果的な指導が可能になると考えたのである。しかし、他の校務の都合や、予算の都合などで、フィリピン訪問はすぐには実現できなかった。2004年8月になって、本学の国際交流事業による予算配分が決定し、2004年12月にプロジェクト国際のメンバー2名がフィリピンを訪問することになったのである。

そのため、今回のフィリピン学校訪問の第一目的は、フィリピンの小学校の教育状況を把握することにあつた。それは、本校に在籍しているフィリピンで初等教育を終えた生徒に対するよりよいカリキュラムを作成するためである。また、フィリピンの中等教育学校を訪問することにより、該当生徒がどのような高校生になることが期待されていたのかを知ること、訪問の目的の1つであつた。教育は積み重ねていくものであり、初等教育には中等教育の準備の側面もある。フィリピンの中等教育学校での教育内容や教育方法は、フィリピンの小学校でのそれと関連があるだろう。日本の場合も同様である。そ

のため、フィリピンで初等教育を受けた後、日本で中等教育を受けている該当生徒には、日本で高校生として学習していくために必要な何かを習得する機会がなかったのではないかと、私達は考えていた。だから、フィリピンの初等教育と中等教育の両方を知ることで、該当生徒が習得する機会を与えられなかったものを知ることができれば、あらためてそれを提供することができるかもしれないと考えたのである。もちろん、この訪問で得た知識を広く共有できれば、全国で同じような境遇の生徒を受け入れている学校での指導にも役立つかもしれないという期待もあった。

2004年8月に予算配分が決定した直後から、フィリピン訪問のメンバーに決定していた植田を中心に、該当生徒の出身校に対して、訪問受け入れに関する打診を始めた。同時に、本校の訪問を受け入れてくれる他の学校を紹介してもらうため、フィリピン大使館に連絡を取り、フィリピンの教育省 Department of Education にコンタクトをとろうと努力したが、いずれもなかなか進展しなかった。そこで、本学文教育学部言語文化学科日本語教育講座の岡崎眸教授を介して紹介された、国際交流基金からデ・ラ・サール大学 (De La Salle University) に派遣されている日本語教育専門家高崎三千代氏に、学校紹介の仲介をお願いすることになった。11月の終わりになって、高崎氏のご尽力により、デ・ラ・サール大学のエバスコ教授の仲介で、マニラサイエンスハイスクール (Manila Science High School) が我々の訪問を受け入れてくれることになった。

一方、10月には日本外交協会の及川伊佐子氏を通じて、独立行政法人国際協力機構人間開発部第一グループに、便宜供与をお願いすることができた。11月半ば過ぎに、国際協力機構から便宜供与を受けられることが決定し、フィリピン事務所を通じて、訪問を受け入れてくれる学校を紹介してもらえることになった。さらに、国際協力機構フィリピン事務所の石澤朋子氏には、学校の紹介だけでなく、学校訪問の日程調整や、通訳の紹介などに加え、現地の治安状況に関する情報提供など、さまざまな便宜をはかっていただいた。

こうして、多くの方々からご協力をいただいた結果、4つの学校を訪問し、そこで授業見学や教員と交流することが可能になった。まず、該当生徒の出身校であるセントメアリーズアカデミー (St. Mary's Academy of Caloocan)。こちらは、小学校と中等教育学校を併設している私立の学校である。公立の学校としては、カムニン小学校 (Kamuning Elementary School) とケゾンシティハイスクール (Quezon City High School)、マニラサイエンスハイスクールを訪問することができた。今回訪問したのは、いずれもマニラ近郊の学校である。これは、該当生徒がマニラ郊外の出身であったことが最大の理由であり、もう1つの理由は日程上の都合である。地方によって、教育の現状が違うことは十分に考えられるので、その点では不十分な調査であったことは否めない。しかし、フィリピンの基礎教育のモデルを知る上では十分に意義のある訪問であったと思う。

本章の最後に、フィリピンの基礎教育制度について3つのことを確認しておきたい。1つは基礎教育の制度そのものに関することである。フィリピンでは基礎教育は教育省が管理、監督する責任を負っている。全ての国民は、原則として6歳になる年からの6年間、義務教育である初等教育を受けることに

なっている。⁽⁴⁾初等教育への就学率はほぼ100%であり、1割程度の中途退学してしまう児童を考慮しても9割程度の生徒が義務教育である初等教育を終えている。⁽⁵⁾6年制の小学校を卒業すると、地域によって差があるが、6割程度の生徒が4年制のハイスクールに進学する。⁽⁶⁾中等教育はハイスクールの4年間だけであり、ハイスクールを卒業すると大学などに進学して、高等教育を受けることが可能になるのである。⁽⁷⁾義務教育が6年間であることと、義務教育段階で進級試験があること、中等教育が4年間であることは、日本の基礎教育制度との大きな違いであると言ってよいだろう。

2つ目は言語についてである。フィリピンは多民族国家であると同時に、多言語国家である。現在は、フィリピン語を国語とし、英語を公用語としているが、日常生活には各地方の言語が使われている。⁽⁸⁾そのため、初等教育の段階から2つの言語が用いられている。社会（歴史、公民と文化）と国語の授業はフィリピン語で、それ以外の授業は英語で行われているのである。これは、小学校では日本語のみによる教育を行い、中学校になって外国語教育が始まった後も、数学や理科はもちろん、外国語の授業も日本語によって行っている日本の基礎教育との大きな違いであると言えるだろう。

3つ目は、近年の教育政策の変化についてである。本校に在籍している生徒がフィリピンで小学校教育を受けたのは、1990年代後半である。しかし、現在、フィリピンではアロヨ政権下で教育改革が実施されつつある。2001年には、教育基本法（the Governance of Basic Education Act）が制定され、その後3年間にわたる中期国家開発計画によって、学校のキャパシティ及び質の向上が図られた。そうした中で、2002年には基礎教育のカリキュラムが改定された。そして2004年からの中期国家開発計画によって、より具体的な改革が実施されつつある。⁽⁹⁾特に、数学・理科・英語の強化という方針には、今回の訪問目的を考えると、留意する必要があると考えられる。私達が訪問した学校では、現在、該当生徒が小学生だった頃よりも、数学や理科、英語の授業時間が増加しているからである。

次章では、私達が訪問した私立の学校、公立の小学校、ハイスクール、理数教育に力を入れているハイスクールの4校に関して報告していきたい。

2. フィリピン学校訪問実施報告

本章では、訪問した学校について、訪問した順に報告していきたい。それぞれの学校で見たこと、聞いたことを、できるだけ詳細に述べていきたいと思う。



a. セントメアリーズアカデミー St. Mary's Academy of Caloocan

セントメアリーズアカデミーはマニラ近郊のカロオカン市にある私立学校である。該当生徒が在学した当時は女子校であったが、現在は共学化されている。しかし、もともと女子校だったためか、女子児童の比率が非常に高く、男子児童の姿はあまりみられなかった。芝生の敷きつめられた中庭があり、教室にはエアコンが完備され、非常に環境の良い学校であると感じた。ちょうどクリスマス前に訪問したため、校内はクリスマスに向けてきれいに飾られていた。各教室の黒板の左端は、各教科で出された宿題を書くためのスペースとして利用されていた。訪問した日、ハイスクールは行事のため授業が行われなかったということだったので、小学校の4年生の英語、5年生の理科の授業を見学した後、校長からカリキュラムに関する説明を受けることになっていた。

英語の授業は、クリスマス前なのでゲーム形式の授業が行われていた。教員が、クリスマスにちなんだ言葉、たとえば、クリスマスツリーや聖人の名前などに関する説明を英語で行い、各グループの代表の児童が、先生は何について説明したのかを当てて、英語で黒板に単語を書くというゲームである。一番早く正解できたグループが勝ちになるので、児童らは座席から走って行って黒板に英単語を書いていた。授業の後半には、教員から指名された数人の児童がクリスマスに関する思い出を英語で語っていた。

私達は日頃の授業を見たいと事前をお願いしてあったので、この授業を見て少し戸惑いを感じた。授業後、担当教員にいつもこのようなゲーム形式の授業を行っているのかと質問したところ、ゲーム形式の授業はよく行うということであった。それには、語彙を増やす目的があるそうだ。また、フィリピンでは教員が強い権限を持って高圧的に指導することが多いが、そうならないように気をつけ、児童が楽しく英語を学べるようにするためにも、ゲーム形式の授業を多用しているとのことであった。ただし、文法や長文読解の授業もきちんと行っているとの説明を受けた。

理科の授業は、Cから始まる英単語を答えるところから始まった。教員に指名された児童がcarやchallengeなどの英単語を答え始めたので、これは本当に理科の授業なのだろうかという疑問を感じたが、そのクイズはいわゆる導入であった。こうした導入も語彙を増やすためによく利用するそうである。たくさんのCから始まる英単語が挙げられた後、「今日のテーマはchangesです。」と展開して、理科教育用の番組を見るのである。その番組の中では、様々なchangesはphysical changesとchemical changesに分けて考えることができると説明されていた。卵を割って熱すると目玉焼きになるような「変化」が「物理的変化」であり、ガソリンを燃やしてエネルギーに変えると同時に排気ガスが発生するような「変化」は「化学的変化」であるとされていた。その番組を見た後、児童らはグループに分かれて、あらかじめ各自が調べてきた「変化」がどちらに該当するのかを考えて、模造紙にまとめ、授業の最後にそれぞれの班の意見を発表していた。いわゆる調べ学習と発表学習を取り入れた授業である。

多くの児童がインターネットを利用して、様々な「変化」を見つけてきていた。また、グループごとの話し合いも活発に行われており、模造紙への書き込みも上手に行っていた。おそらく、日頃から調べ

学習やグループ学習、発表学習を取り入れているのだろうと思われる。授業後に担当教員に確認したところ、やはり、調べ学習はよく行っているとのことであった。インターネットを利用して調べるように指導しているわけではないが、インターネットを利用する生徒が多いそうだ。気になったのは、physical changesをgood changesとし、chemical changesをbad changesとしていたことである。そのように単純に考えることはできないように思われるが、物の性質を変える「化学的変化」は環境などへの影響が大きいので良くないと説明されていた。

2つの授業を見学した後、セントメアリーズアカデミーで使用している教科書を見せてもらうことができた。どの教科の教科書も、日本の小学校の教科書に比べると、使われている紙は粗悪であったが、大きく厚かった。内容も、絵や写真は少なかったが、特に足りない点があるようには見えなかった。前述の変化に関する理科学習を例にすると、日本の小学校での授業とはアプローチが違うかもしれないが、例えば化学式を用いた学習などは日本の小学校でも行われていないのだから、日本の小学校では学ぶ内容が、フィリピンでは中学校に先送りされているとは言えないだろう。つまり、第1章で述べた「日本では小学校で学習する内容を、フィリピンではハイスクールで学ぶのではないか」というプロジェクト国際の推測は正しいとは言えないことがわかったのである。

その後、校長から学校に関する説明を受けることができた。セントメアリーズアカデミーでは2002年のカリキュラム改定にともなって、英語と数学と理科の学習時間を増やしたとのことであった。以前はどの教科も40分授業を週3回行っていただけであったのに対して、現在は3年生以上の学年では3科目とも50分授業を毎日行っているというから、かなりの時間増である。⁽¹⁰⁾また、このことから、該当生徒が小学校の段階で受けた算数の授業時数が、日本の小学校を卒業した本校での同級生たちに比べて、かなり少なかったということがわかった。⁽¹¹⁾後述するように、フィリピンでは増加した授業時間を反復練習に当てている。つまり、授業時間が短かった時期には、反復学習により知識を定着させる時間が少なかったのである。したがって、該当生徒には反復学習の経験が不足しているのではないかというプロジェクト国際の推測は、数学に関してはあてはまっていると言えるだろう。

一方、フィリピン語と英語に関しては、1年生の段階から文法をきちんと教えるとともに、図書館で静かに本を読む時間を時間割に組み込み、読解力の向上にも取り組んでいるそうである。このカリキュラムは該当生徒が在学していた頃から変わっていないとのことであった。つまり、語学学習に関しては反復学習が足りなかったのではないかという推測があてはまるとは言えないということだ。

全体的には、今、日本の学校が目指している、詰め込み学習や暗記学習に偏らない楽しい学習、インターネットを取り入れた調べ学習、発表学習を通してプレゼンテーション能力を向上させる学習、などの教育方法が実践されているという印象を受けた。さらに、昨今提唱されている多読学習も取り入れられている。一方、校長は家庭学習の習慣や反復学習の重要性を強調していた。それが、各教室の黒板にメモされていた宿題の多さに表れているのだろう。

b. カムニン小学校 Kamuning Elementary School

カムニン小学校は、1939年にケゾン市に設立された小学校であり、日本の占領下では運動場がさつまも生産に利用されたこともあるそうだ。2004年現在、58人の教員が約2700人の児童の指導に当たっている。1年生が520人と最も多く、学年があがるにつれて425人、492人、428人、446人、393人となっている。6年生と3年生以外にはそれぞれ留年生が若干名いる。最大で3050人まで受け入れる準備があるということだが、教室として使えるのは41室であり、エアコンなどの設備は整っていない。パソコンが22台、テレビが2台あるが、壊れているものもある。

授業は全ての学年でセクション別に行われている。いわゆる習熟度別の授業である。これは、フィリピンの学校では一般的なスタイルであり、先に訪問した私立のセントメアリーズアカデミーを含める全ての訪問校でセクション別の授業が行われていた。セクション1が最も習熟度の高い生徒を集めたクラスであることも全ての学校で共通していた。カムニン小学校では1年生は10セクション、他の学年は8セクションに分けられており、それぞれのセクションには名前がつけられていた。たとえば、1年生は花の名前を、6年生は惑星の名前をセクション名にしていた。これは、生徒に自分が何番目のセクションにいるのかをあまり意識させないための配慮であるそうだ。複雑な時間割のある日本とは異なって、基本的には毎日同じスケジュールで授業が行われている。⁽¹²⁾小学校では、4年生以上の学年では、数学と理科と国語の授業を毎日60分、英語の授業を毎日80分行っている。⁽¹³⁾ただし、休み時間はとられていないので、実質授業時間は少し削られているかもしれない。また、体育などの授業は毎日ではない。時間割には「音楽・美術・体育」を1つにした科目が置かれ、曜日によって異なる授業を行っているとのことであった。私達は、6年生のセクション1での数学の授業と、4年生のセクション4でのフィリピン語の授業を見学することができた。

見学した6年生のセクション1は50人クラスであった。この日の数学は分数の割り算の授業であり、帯分数を仮分数に直して、割り算をした後、再び帯分数に戻すという手順の練習が行われていた。最初は、教員が見せた問題を、児童が各自のノートで計算をした後、スクラッチボードに答えを書いて掲げるといった形で授業が進められた。教員は、それらのボードをチェックして、答えの違っている生徒や計算ができない生徒に指導をしていた。そのため、1人の教員が50人もの生徒を相手にしているにもかかわらず、かなり細やかな指導が行われているように感じた。授業後に担当教員から聞いた話では、同じセクションであっても生徒の習熟度に差があるため、毎日の宿題は生徒によって違うものを課しているとのことであり、全体的に細やかな指導が行われているようである。

その後、5題ぐらいの問題を、それぞれのノートで解かせてから、隣の児童とノートを交換させ、教員が黒板に書いた正解を見ながらチェックしていくという形で授業が進められた。最後に、10題ほどの問題を書いたプリントを配り、解く時間を与えた後、指名された児童に答えを黒板に書かせ、さらにどのようにして解いたのかを英語で説明させた。他の生徒には黒板を見て自分の解答をチェックさせ、授業終了時にそのプリントを回収していた。児童の計算の速度にはかなり差があったが、与えられた問題

を解けない児童はいなかった。担当教員の話によると、教育改革により数学の授業時間が増えたが、教える内容はさほど増えておらず、反復練習をする時間を以前より多く取ることができるようになったため、定着がよくなったそうである。

数学の授業見学をして最も印象的だったのは、黒板に書いた自分の答えを英語で説明できなかった児童がいたことである。割り算をする際に約分をしたのだが、どうして約分をしたのかという教員の問いに、上手く答えられなかったのである。答えられなかった理由として、英語では説明できない、あるいは、なんとなく約分をしたが実はよく理解できていない、という2つが考えられたので、授業後に担当教員にその疑問をぶつけてみたところ、即座に英語のせいであるという答えが返ってきた。しかし、英語で学習していながら、内容は理解できているのに英語で説明できないということがありうるのだろうか。この点については、第3章で考察したい。

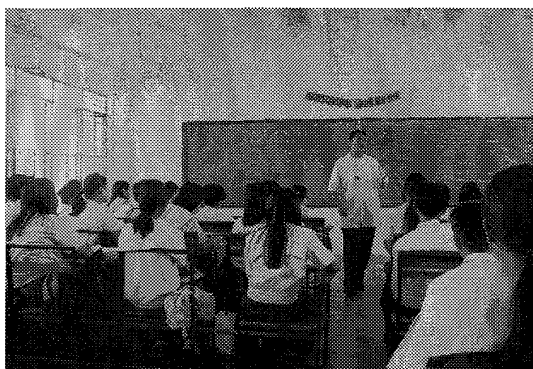
その後に見学した4年生のセクション4は56人のクラスであった。フィリピノ語の授業は、残念ながら、どのように授業が進められているのかを、直接理解することはできなかったため、通訳を通じての理解になった。まず、教員が黒板に模造紙1枚半分ぐらいの大きさの紙をはり、そこに書かれている長文から、形容詞を探すように児童らに指示をした。児童らが、いくつかの形容詞を答えた後、それぞれの形容詞の単数形、複数形、比較級、最上級を確認していくという作業が行われた。その後、やはり、黒板に大きな紙がはられ、そこに書かれている短文の空欄にあてはまる形容詞をノートに書き、その後正解できたかどうかをチェックするという形で、その日の学習内容の復習をして授業は終わった。日本の学校では、英語の授業で行われるようなスタイルの授業である。

最初の長文も、最後の短文も、文章全体を読むという作業をしていなかったため、植田が音読や読解はあまりしないのかどうかを、担当教員に確認したところ、音読や読解の指導も行っているということであった。しかし、国語であるフィリピノ語が母語ではない児童もいるため、文法や語彙を教えることを重視するメソッドになっているということであった。⁽¹⁴⁾文法から教えるというメソッドで、外国語教育と同じように、国語教育が行われている点は、日本の小学校での国語教育とは異なる点であろう。

カムニン小学校では、先生方が非常に熱心に授業をなさっているのが印象的であった。上述したとおり、数学の授業では児童の習熟度に対応した、細やかな指導が行われていた。また、全員が教科書を持っているにもかかわらず、同じ問題や文章を模造紙のような紙に書いて黒板にはって授業が進められていたが、その紙は毎年書き直しているそうである。大変手間のかかる作業であると思うが、多くの生徒の興味を散らばらせないためには必要な作業だと考えられているようであった。

c. ケゾンシティハイスクール Quezon City High School

ケゾンシティハイスクールは1947年にカムニン小学校を卒業した生徒を受け入れる中等教育学校として設立されたハイスクールであり、カムニン小学校に隣接している。2004年現在、123人の教員が約5000人の生徒を指導している。そのうちの、1割程度は留年者である。⁽¹⁵⁾ケゾンシティハイスクール



の校舎は5000人の生徒を同時に収容することは不可能な規模であるため、午前授業のクラスと午後授業のクラスに分けて、2シフト制で授業を行っている。午前のクラスは午前6時には授業が始まり、午後のクラスは午後6時まで授業が行われる。そのため、教育省の示したカリキュラム例とは若干異なった時間割が組まれていた。フィリピン語、英語、数学、科学は毎日60分の授業が行われているが、それ以外の歴史、保健、体育、家庭などの科目をマカバヤンMakabayan（民族教育）とし、曜日によって違う科目の授業を行っているそうである。⁽¹⁶⁾ケゾンシティハイスクールの校長の話によると、9000人の生徒を抱えるハイスクールもあり、そうした大規模な学校には3シフトで授業を行っているところもあるそうだ。

訪問した日はティーチャーズデイ Teacher's Dayという行事の日だった。先生をヒーローとする行事だそうだが、先生のために生徒が歌を歌ったり踊りを踊ったりするという行事だった。授業を見学した後、私達もそのイベントを見学させてもらうことができた。日本の中学生や高校生も好みそうなダンスを踊っている生徒たちを見て、校長が「私はこういう踊りはセクシー過ぎて学校にはふさわしくないと思うけれども、生徒はこういう踊りが好きなのよ。困ってしまうわね。」とおっしゃっていたのが、印象的であった。また、学校で人気のある生徒がステージに上がり歓声を浴びていたのだが、日本の学校でも人気者になりそうな生徒ばかりで、若者文化の共通性を感じることができた。

そういう事情だったので、本来授業を行わない日だったのだが、私達のために特別に授業をしてくれることになっていたので、私達はいくつかの授業を見学することができた。しかし残念ながら、どの授業も模擬授業のようになってしまったため、日頃の授業における生徒の活動を観察することはできなかった。おそらくすでに一度行った授業であると思われ、生徒は自分のノートを見ながら授業を聞いており、教員から指名されると答えていたが、ノートをとるなどの作業はしていなかった。また、当たり前のことなのだが、あまり授業に集中している様子ではなかった。とはいえ、どのような形で授業が行われているのかを見ることはできた。特に時間をかけて見ることはできたのは2年生のセクション8のクラスでの英語の授業と、3年生のセクション3のクラスでの数学の授業である。⁽¹⁷⁾

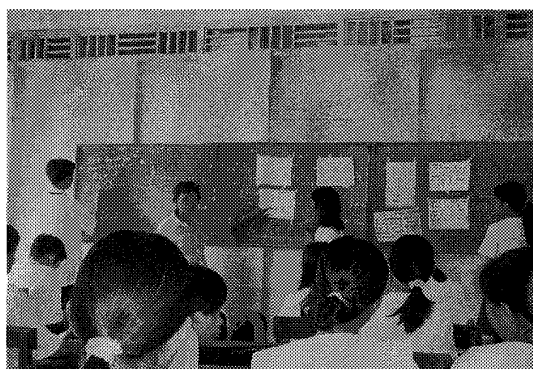
英語の授業は時制に関する授業であった。65人の生徒が着席している教室で、1人の教員が黒板を利用しつつ時制について説明する、いわゆる講義形式の授業であった。板書の量は少なく、ほとんどの説明は口頭で行われていた。動詞の時制を答えさせていった後、助動詞がある場合には助動詞が時制に

じて変化するので動詞は原形を利用するという説明をして、授業が終了した。小学校から文法を学習してきている生徒への授業にしては、基礎的な学習であるように思われたので、その点を担当教員に質問すると、生徒の英文法理解度にはかなり差があるため、セクションによって全く違うタイプの授業をしていると答えてくれた。このセクションでは、時制の理解などの基礎的な文法事項の復習を重視して授業を進めているそうである。

数学の授業は図形の授業であった。図形の性質を利用して角度を求めていく問題を解いていた。日本でも中学校で学習する内容である。黒板にはられた問題を、生徒は各自のノートで解き、指名されたら黒板に解答を書き、どのようにしてその答えを導いたかを英語で説明していくという、カムニン小学校で見たのと同じスタイルの授業であった。この日は、すでにノートに答えが書かれていたので、生徒がどのくらいの時間をかけて解答するのかを見ることはできなかった。授業後に担当教員に質問したところ、教育政策が変化して授業時間が増加してから、計算力が高まり正確に早く計算できる生徒が増えてきているそうである。また、以前は図形を扱う際には証明を中心に学習していたが、現在は同時に計算力も伸ばすために角度を求める、面積を求めるというような問題を多く取り入れるようになっているそうである。

d. マニラサイエンスハイスクール Manila Science High School

マニラサイエンスハイスクールは1959年に設立された公立のエリート校である。1966年には現在の場所に校舎が建てられ、その形が整えられた。ニューヨークのブロンクス科学高校the Bronx High School of Science⁽¹⁸⁾をモデルに、数学と理科に重点を置く特別カリキュラムを組んでいるが、その他の教科目の指導にも力をいれているとのことであったが、残念ながら学校要覧をいただくことができなかったため、全体のカリキュラムはわからない。ケゾンシティハイスクールに比べると、校舎や机などの設備が整っていた。生徒数は1学年220人前後であり、全校でも900人弱である。教員は100人ほどいるので、1クラスは35人前後で編成されている。一般的な公立のハイスクールに比べると、生徒にとってはかなり恵まれた学習環境であると言える。こうした面からも国が数学や理科の教育に力を入れていることがうかがえた。最近の教育政策で、数学や理科がより重視されるようになり、サイエンスハイスクールを志望する小学生が増えてきているようだ。前述したセントメアリーズアカデミーのようなハイ



スクールを併設した私立小学校からも、サイエンスハイスクールを志望する児童が増えて困っていると、セントメアリーズアカデミーの校長が話してくれた。それらのサイエンスハイスクールの中でも、マニラサイエンスハイスクールは伝統あるエリート校である。この学校もクラス編成は習熟度別であり、セクション名としてはニュートンやファラデーなどの科学者の名前を用いていた。マニラサイエンスハイスクールでは英語の授業と数学の授業を2クラスずつ見学することになっていた。

最初に見た英語の授業は、前回までの授業で読んだ寓話について、グループごとに発表していく形式の授業であった。各グループは分担している部分について絵などを用いて、発表していく。教員は、その発表を受けて、発表者だけではなく全ての生徒に質問をしていく。本文に書いてあることについて質問して読解力を、本文に書かれていないことを質問して思考力をのばしていくとのことであった。生徒は教科書やノートを見ずに答えていくので、日頃からかなり綿密に読みこみ、理解することが求められているのであろうと思われた。また、生徒が答える際に文法的な誤りがあると、教員は即座に訂正していた。授業では、文法的に正しい英語を話すように指導することに力を入れているそうである。

その次に見た英語の授業は、やはり前回までの授業で読んだ物語について、グループごとに発表していく形式の授業であった。この授業ではグループごとに劇やテレビ番組のパロディなどの形で発表しつつ、登場人物の行動を良い行動と悪い行動に分けるなどの価値判断を行い、他の班の生徒が発表者たちの意見を採点する形式で進められていた。採点者として指名された生徒は、自分がなぜそのように採点したのかを説明するのである。

どちらの授業の担当教員も、生徒達は英語の基礎をすでに小学校で学んでいるので、文法だけを教えるような授業はしないと話していた。そして、運用能力を高めるための授業を行うために、発表やディスカッションを多く取り入れているそうである。その中で、正しい英語を使用できるよう、適宜文法事項の復習や解説を行っているそうである。

数学の授業は2つ見学することになっていたが、1つ目のクラスは既に授業を終えており、授業の見学はできなかった。その代わりに生徒や担当教員と少し話をすることができた。この時、担当教員からマニラサイエンスハイスクールの数学のカリキュラムについてわずかながら話を聞くことができた。1年生では代数とコンピューターサイエンスを、2年生で幾何と統計を、3年生で三角関数や1年生で学ばなかった範囲の代数を、4年生では微分や有限論などを中心に学ぶそうである。⁽¹⁹⁾また、物理などでも高等教育機関で利用される教科書を使って学習しているとのことであった。そうしたハイレベルな学習は大変ではないかと質問したところ、生徒たちは「数学や理科が好きなので、勉強は楽しい。」と話してくれた。

その後、2年生のセクション2のクラスで行われている授業を見ることができた。図形に関する授業が行われていた。授業の前半は証明問題を、後半はケズンシティハイスクールの3年生のクラスで見学したのと同じような、図形の性質を利用して角度を求める問題を扱っていた。証明問題は、文章から図形を再現した後、求められている証明を行う形式の問題であった。教員は一段階ずつ生徒を指名して答

えさせていた。同じような問題を3題解いて、その都度、平行線の性質や二等辺三角形の性質などを丁寧に確認していた。

角度を求める問題については、生徒はその場で与えられた問題を解き、解けると手を挙げる。挙手している生徒の中から、教員が指名した生徒が黒板に解答を書き、全員で答えをチェックしていくスタイルである。黒板に書かれた答えを見ていて、気になったことは生徒の計算方法であった。例えば、以下のような計算をしているのである。

$$10x-4=2x+48-8x-4 \quad \dots \textcircled{1}$$

$$18x-4=2x+48-4 \quad \dots \textcircled{2}$$

$$16x=48 \quad \dots \textcircled{3}$$

$$x=3 \quad \dots \textcircled{4}$$

角度を求めるために、図形の性質を利用して①の式を立てた後、③までを頭の中で計算するのではなく、②の段階を経るのである。そして、突然③の式が求められる。最後に関しては、③から④の答えをすぐ出してしまおう生徒と、約分する以前の分数を書く生徒が、その授業に関してはほぼ同数いた。授業後に、担当教員からは、途中の式を書くように指導しているので、②の式を書くのだとの説明を受けた。この計算は私の印象に残った。私は数学が専門ではないので、こうした途中式の書き方が一般的かどうかはわからないのだが、①から②をへて③を導く書き方にしては、②が中途半端な段階にあるように感じられるのである。①と③の間に一段階はさむなら、全てのxを左辺に集める段階が適当であるように思われる。あるいは、①、②ときたら、③にいたる前にもう1つ式があってもいいように思われる。

マニラサイエンスハイスクールは非常に難関校なので、小学校の学習過程を習得できていない生徒は入学できない。さらに、数学に関しては、一般的なハイスクールより多くの内容を教えるために、違うカリキュラムで授業が行われている。それにもかかわらず、かなり丁寧に授業が進められていた。これは意外であった。英語に関しては、フィリピンの中等教育がめざしている理想的な在り方の授業を見ることができたように思う。⁽²⁰⁾

3. フィリピンで基礎教育を受けた児童・生徒への指導に向けて

今回の訪問の第一目的は、フィリピンの基礎教育の内容や方法を知ることであった。それは、本校に在学しているフィリピンで初等教育を受けたフィリピン国籍を持つ生徒に、より効果的な指導を行うためである。プロジェクト国際では「日本では小学校で学習する内容を、フィリピンでは中等教育学校で学ぶのではないか」、「フィリピンの小学校では、いわゆるドリル学習などの反復学習をあまりさせていないのではないか」、という2つの推測をたてていた。1つ目の推測は、教科書を確認することにより、ほとんどあてはまらないことが確かめられた。⁽²¹⁾

2つ目の推測は、ある程度あてはまることがわかった。特に算数に関しては、該当生徒が在学した

頃、小学校の算数の授業時数が少なく、反復学習は自宅学習に任せられている部分が多かったのである。授業時間が短いと、授業の中で自宅学習の方法を指導する時間も不足しがちになると推測される。つまり、宿題などの自宅学習を積極的にこなせない生徒にとっては、反復学習が不足する状態であったと考えられる。しかし、英語などの語学学習の場合、少なくとも該当生徒の卒業した小学校に関しては、この推測が必ずしもあてはまるとは言えないことがわかった。とはいえ、近年の教育政策において、数学・理科と並んで英語学習の強化が重視されていることから推測するに、一般的には英語の定着がかんばしくなかったのだろう。その背景に、英語の学習時間、とくに反復学習の時間が不足していた可能性はある。こうしたことが確認できたことは、今後、該当生徒への支援を計画していくにあたって、大きな成果であった。

ただし、フィリピンの基礎教育における反復学習の不足は、今後、解消されていくのではないかと思う。カムニン小学校とケゾンシティハイスクールの先生方は、特に算数・数学に関して、授業時間が増加したことによって、授業時間内に反復学習の時間を多くとることができるようになり、学習内容の定着が良くなったと異口同音におっしゃっていた。セクションによって生徒の学力に差があるとはいえ、繰り返し練習する時間ができたので、どのセクションも以前より良くなっているそうである。わずか2年の間に、数値化できる成果をどれほど出せたのかには疑問の余地はあるが、少なくとも現場の教員は手応えを感じていた。その背景として、フィリピンでは反復学習を重要視する傾向が強いことが推測される。最後に訪問したマニラサイエンスハイスクールの授業でも、同じ内容を、形を変えて、丁寧に繰り返し指導していた。それは、現在のフィリピンの基礎教育で反復学習を重視する傾向が強いことを、再確認させられる授業であった。

今回のフィリピン訪問により、基礎教育の段階でフィリピンから日本に移動した生徒が直面するであろう問題としては、やはり言語の問題が最も大きい問題であると感じた。それは、特に初等教育に関して、フィリピンと日本の学習内容や学習方法は、私達が推測していた以上に似通っていたからである。両国とも教科書に沿って授業が実施されていると考えるなら、算数や理科に関しては、得る知識にはほとんど差がないだろう。学習方法に関しては、すでに来日している児童・生徒に関しては、日本で初等教育を受けた生徒と比較して、反復学習の経験不足により生じやすい、自分で学習する方法を身につけていないという問題を抱えている可能性がある。したがって、その点を考慮した支援を考えていく必要があるだろう。しかし、今後、来日する児童・生徒に関しては、そうした問題は減っていくのかもしれない。それは、既に述べたとおり、現在、フィリピンの教育現場では反復学習が重視される傾向にあるからである。さらに、私立の学校やサイエンスハイスクールのようなエリート校では、調べ学習や発表学習も多く取り入れられている。来日した生徒の出身校によって、あるいはフィリピンでの習熟度によって差はあるだろうが、学習内容の大幅な不足や、日本の学校での授業スタイルへの違和感はさほど大きくないと考えられる。

結局、両国の基礎教育を比較すると、最も大きな差異があるのは言語なのである。これは、フィリピ

ノ語と日本語の違いということではない。日本では、児童・生徒は外国語も含めた全ての教科目を日本語によって学習する。つまり、日本語によって思考しながら学び、個別の知識を習得すると同時に思考力を確立していくのである。しかし、フィリピンでは、児童・生徒は小学1年生の段階から、国語や歴史以外の科目を英語という外国語を通して学ぶのである。つまり、2つの言語による思考力を確立していくのである。さらに、国語や歴史を学ぶ際に使用されるフィリピン語についても、それを母語としない生徒は、より多くの言語を用いながら自らの思考のシステムを確立していかななくてはならないのである。

第2章で触れた、自分が解いた問題を説明できなかった児童は、算数を理解していなかったのか、英語を理解していなかったのか。実は、この疑問はフィリピンではあまり通じなかった。算数や数学の授業に関して言えば、どの学校の授業を見ていても、生徒が説明できないのは数学を理解できていないからなのか、それとも英語を理解できていないからなのかという疑問を私自身は感じた。さらに、理解はできているが英語では説明できないということは、理解できていないということではないのかと考えてもいた。そして、そうした疑問を解消するために通訳を通じて、あるいは直接、教員に質問するのだが、その質問は通訳にも教員達にも理解してもらえなかったのである。この疑問は、全ての教科目を日本語を通して学び、日本語を通して思考しながら習得していく私達だからこそ感じる疑問であり、そもそも母語で数学を思考しないことになっているフィリピンの教員や通訳には生じない疑問であったのだろう。私にとって「英語で数学を学ぶ」ことと、フィリピンの人々にとって「英語で数学を学ぶ」ことは違っているのである。その違いは多言語社会に生きているかどうかによって由来しているのだと思う。そして、ここに日本で基礎教育を受けて育つ生徒と、フィリピンで基礎教育を受けて育つ生徒との差異が生じる可能性があると考えられる。

それでは、フィリピンで基礎教育を受けた児童・生徒への指導の際に、注意すべきことは何であろうか。結局は、個別の生徒の抱える問題に、ケースバイケースで対応する必要があることはいうまでもない。しかし、重要な共通項は児童・生徒が何を理解していないか、ではなく、何をどのように理解しているのかをできるだけ早く把握することであると思う。たとえば、同じ英文を読む時、同じ計算をする時、文章の解析方法や計算の順序など、考え方が日本で基礎教育を受けている生徒と大きく違っている可能性がある。それは悪いことではないので考え方を矯正する必要はもちろんない。しかし教員がそうした考え方の違い、つまり指導を受ける児童や生徒の思考の構造を理解しておかなくては、知識や日本語を与えても定着させることが難しいだろう。これは、指導を受ける児童・生徒だけではなく指導する教員にとっても辛いことである。同時に、どのような学習習慣を身につけているのかを知ることも重要であろう。つまり、知識や日本語力のような目に見えやすい差異よりも、思考方法や学習習慣など、把握することが難しい差異ほど理解する必要があるということだ。これは、おそらく、フィリピン以外の国で基礎教育を受けた児童・生徒に関しても言えることなのではないだろうか。

しかしながら、言葉の通じない段階ではもちろん、生徒がある程度日常の日本語会話ができるように

なっても、やはりそれらを把握することは難しい。どうすれば、できるだけ早くそれらを把握できるのか、その方法を見つけることを今後の研究の課題としたい。

JSLカリキュラムがいわゆるカリキュラム形式での作成を断念し、ツールとしてのカリキュラムという形になったことが象徴しているように、外国人生徒が抱える問題は多様であり、一般論で片付けることや1つのメソッドで解決することはできない。⁽²²⁾しかし、なんらかの共通項はあるはずである。その共通項を探し出し、より効果的な教育を提供していくことが多文化共生社会で教育に携わる者の務めであろうと考える。

おわりに

今回、フィリピンの学校を訪問することにより、異文化を理解するとはどういうことかを自分が解っていなかったことを痛感した。多言語社会とはどのような社会なのか、そこではどのような教育が行われるのかを、具体的にはイメージできていなかったことに気づいたのである。今回の訪問により、異文化を理解することの難しさ、そして楽しさを学んだことをとても嬉しく思っている。この経験は、外国人生徒への指導だけでなく、全ての生徒への指導に活かしていきたい。

訪問した学校の先生方は、お忙しい中、私達に様々なお話をしてくださった。特に、ケゾンシティハイスクールでの先生方との交流は、教員としての自分を省みる機会にもなった。このような研修の機会を与えてもらったことに深く感謝している。

また、今回の学校訪問に際して、多大なるご協力を下さった独立行政法人国際協力機構の萱島信子氏、佐久間潤氏、松浦正三氏、石澤朋子氏、日本外交協会の及川伊佐子氏、お茶の水女子大学の岡崎眸教授、国際交流基金派遣日本語教育専門家（テ・ラ・サール大学客員講師）高崎三千代氏、テ・ラ・サール大学のエバスコ教授には感謝の意を表したい。ありがとうございました。

注

- (1) 国際学級検討委員会「外国人生徒受け入れの試み ～その1～」『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』第45号1999年 他、本校では1987年から国際理解を深める教育を実施する目的で「国際学級」の設置を目指したが、概算要求が通らずその実現には至らなかった。しかし、特設講座としての「異文化理解」設置や短期留学生の受け入れなどを通して、グローバルな視野を持つ人材の育成に努めてきた。それらの経験を活かして、1996年に外国人生徒の受け入れを開始し現在に至っている。その過程において、これらの研究の担い手も、国際学級検討委員会から、国際理解教育推進委員会を経て、高校研究推進委員会内の1つのプロジェクトとしてのプロジェクト国際へと変遷してきた。
- (2) 詳細に関しては以下の本校紀要を参照していただきたい。

国際学級検討委員会「外国人生徒受け入れの試み—その1—」第45号2000年

国際学級検討委員会「外国人生徒受け入れの試み—その2—」第46号2001年

- (3) 筆者が担当している日本史に関しては、抽象思考を可能にするレベルまで日本語力を引き上げることを目標として、語彙の蓄積と思考訓練を目指し、小学生の社会の教科書を利用した取り出し授業を行った。この授業の詳細については別の機会に紹介したいと思う。
- (4) Republic Act No.9155, the Governance of Basic Education Act, 2001, <http://www.fwwpp.org>
- (5) 米村昭夫・玉懸光枝「フィリピンにおける初等教育発展 ー現状、規定要因の統計的分析ー」『世界の教育開発』明石書店2003年、フィリピン教育省の統計を信じると小学校の修了率は7割程度になるが、本書ではフィリピン教育省の非進級率から留年率を引いて得られる約7%という中途退学率は過大であると批判し、センサスの分析から導かれる約2%という中途退学率を妥当だと結論付けている。また、中途退学の原因として、家庭の経済事情や小学校の不足、進級試験の存在を挙げている。今回訪問したカムニン小学校も留年者数は非常に少なく、学年があがるにつれて児童数が減っているので、中途退学者の存在が推測される。一方、私立小学校では、落第させるのがかわいそうでぎりぎりの成績で進級させることもあるという話を聞いた。
- (6) Medium Term Philippine Development Plan 2001-2004, Medium Term Philippine Development Plan 2004-2010, <http://www.neda.gov.ph> p.196
- (7) Republic Act No.9155, the Governance of Basic Education Act, 2001, <http://www.fwwpp.org>
- (8) 大野拓司、寺田勇文『現代フィリピンを知るための60章』明石書店2001年 pp.71-79 平尾節子「フィリピン共和国における言語教育政策」『言語と文化』5号愛知大学言語教育研究室 2001年 pp.13-17、1937年のケソン大統領宣言により、政治経済の中心であるマニラ付近で話されていたタガログ語を基礎とする国語作りが始められた。1946年以降、英語、スペイン語、タガログ語が公用語とされた期間を経て、1959年にはタガログ語に英語、スペイン語、フィリピンの諸言語の語彙を取り入れたピリピノ語が国語とされた。1987年憲法により、ピリピノ語にさらに他の言語の語彙を取り入れたフィリピノ語が国語として定められ、現在に至っている。また、この間英語は公用語でありつづけている。今回の訪問で出会った、セブ出身でセブノア語を母語とするガイドの女性は、「フィリピノは国の名前であり、そんな言葉はない。学校で使っているのはタガログ語だ。」と話していた。いまだに、タガログ語を国語の基礎としていることへの反感が存在していることがよくわかる。
- (9) Medium Term Philippine Development Plan 2001-2004, Medium Term Philippine Development Plan 2004-2010, <http://www.neda.gov.ph> pp.195-208
- (10) セントメアリーズアカデミーのハイスクールでは、数学と英語は60分授業を毎日行い、理科は60分授業を週に6回行っているそうである。
- (11) 文部省『小学校学習指導要領』大蔵省造幣局1989年、2004年度の高校2年生は小学校2年生から6年生までの5年間、1年に45分×175時間の算数の授業を受けることになっていた。
- (12) カムニン小学校6年生セクション1の時間割である。

時間	教科	
6:00-7:00	Mathematics	数学
7:00-8:00	Filipino	フィリピン語(国語)
8:00-9:00	Science	理科
9:00-9:20	Supervised Recess	休憩
9:20-10:00	Ind. Arts / H. E.	技術・家庭
10:00-10:40	Hekasi (Heograpiya, Kasaysayan at Sibika)	歴史・地理・社会
10:40-12:00	English	英語
12:00-12:40	MSEP (Musika, Sining at Edukasyong Pangkalusugan)	音楽・美術・体育

- (13) DepEd Order No.43 s. 2002 The Basic Education Curriculum, 8.29.2002, DepEd Order No.51 s. 2004, Standard Curriculum for Elementary Public Schools and Private Madaris, 8.28.2004, <http://www.deped.gov.ph>、1年生から3年生までの学年では、英語を毎日100分、フィリピン語と算数を80分行うことになっている。また、理科は1・2年生では授業がなく、3年生で40分行うことになっている。
- (14) マニラ郊外のカムニン小学校でも、1年生のフィリピン語のテストで「読めない Non-reader」という結果を取る生徒がいる。2004年1月のテストでは、467名受験したうち31名がその判定を受けていた。教員の話によると、地方から保護者の仕事の都合などによりマニラ周辺に移動してきた児童も多いので、マニラ周辺でもフィリピン語の学習に苦しむ生徒がいるようだ。
- (15) 2002-3年の場合、4566人の在校生のうち465人が留年者であった。学年が上昇するにつれ、留年者の数は減っていくが、生徒数も減っているのでやはり中退者がいると考えるべきだろう。一方で卒業した生徒のほとんどは高等教育機関に進学するとのことであった。
- (16) DepEd Order No.43 s. 2002 The Basic Education Curriculum, 8.29.2002, DepEd Order No.37 s. 2003 Revised Implementing Guidelines of the 2002 Secondary Education Curriculum Effective School Year 2003-2004, 5.15.2003, <http://www.deped.gov.ph> 2003年度の指針によると、フィリピン語を週に240分、英語と数学を300分、理科を400分、マカバヤンを1～3年生で740分、4年生で860分実施することになっている。また、マカバヤンはAP(歴史・政治)200分、TLE(家庭・経済)240分、MAPEH(芸術)240-300分、EP(価値教育)60-120分とされている。これは、2002年のカリキュラムに比べると、フィリピン語の時間が減らされ、理科の時間が増やされている。
- (17) 2004年の2年生には21のセクションが、3年生には17のセクションがあるようだ。
- (18) 1938年に創立されたアメリカで最も古い公立の科学専門高校
- (19) DepEd Order No.43 s. 2002 The Basic Education Curriculum, 8.29.2002, DepEd Order No.37 s. 2003 Revised Implementing Guidelines of the 2002 Secondary Education Curriculum Effective School Year 2003-2004, 5.15.2003, <http://www.deped.gov.ph> 一般的なハイスクールのカリキュラムでは、1年生で代数の基本を習得し、2年生で中級代数、一次方程式、不等式、二次方程式、有理数、指数、根数などを学習し、日常生活上応用できる能力を高める。3年生では幾何を習得する。日常生活上必要な形やサイズ、幾何的關係、三角関数、土地の方形法、相似、円形、座標などを習得す

ることになっている。4年生については記述がない。マニラサイエンスハイスクールの教員の話によると、一般のハイスクールでは微分・積分は全く学習しないそうである。

- (20) Guidelines for the Pilot Implementation of the 2002 Secondary Education Curriculum, DepEd Order No.43 s. 2002 The Basic Education Curriculum, 8.29.2002, DepEd Order No.37 s. 2003 Revised Implementing Guidelines of the 2002 Secondary Education Curriculum Effective School Year 2003-2004, 5.15.2003, <http://www.deped.gov.ph>
- (21) 全ての学校で使用している教科書を見ることが出来た。また、書店で様々な種類の教科書を見比べることもできた。
- (22) 文部科学省初等中等教育局国際教育課『学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について（最終報告）—小学校編—』2003年